

光があるうちに、光を信じなさい

ヨハネ福音書12:34-43

【新改訳 2017】

- 12:34 そこで、群衆はイエスに答えた。「私たちは律法によって、キリストはいつまでも生きて聞きました、あなたはどうして、人の子は上げられなければならないと言われるのですか。その人の子とはだれですか。」
- 12:35 そこで、イエスは彼らに言われた。「もうしばらく、光はあなたがたの間にあります。闇があなたがたを襲うことがないように、あなたがたは光があるうちに歩きなさい。闇の中を歩く者は、自分がどこに行くのか分かりません。」
- 12:36 自分に光があるうちに、光の子どもとなれるように、光を信じなさい。」イエスは、これらのことを話すと、立ち去って彼らから身を隠された。
- 12:37 イエスがこれほど多くのしるしを彼らの目の前で行われたのに、彼らはイエスを信じなかった。
- 12:38 それは、預言者イザヤのことばが成就するためであった。彼はこう言っている。「主よ。私たちが聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕はだれに現れたか。」
- 12:39 イザヤはまた次のように言っているので、彼らは信じることができなかつたのである。
- 12:40 「主は彼らの目を見えないようにされた。また、彼らの心を頑なにされた。彼らはその目で見ること、心で理解することも、立ち返ることもないように。そして、わたしが彼らを癒やすこともないように。」
- 12:41 イザヤがこう言ったのは、イエスの栄光を見たからであり、イエスについて語つたのである。
- 12:42 しかし、それにもかかわらず、議員たちの中にもイエスを信じた者が多くいた。ただ、会堂から追放されないように、パリサイ人たちを気にして、告白しなかつた。
- 12:43 彼らは、神からの栄誉よりも、人からの栄誉を愛したのである。

【祈りながら考えよう】

- (1) 主が「人の子は上げられる」と言われたことは、「キリストはいつまでも生きる」と聞いていた旧約聖書の預言と矛盾していると考えたユダヤ人たちは、どんな理解が欠けていましたか。
- (2) 36節の「光があるうちに、光の子どもとなれるように、光を信じなさい」とは、どういう意味ですか。
- (3) 42節の「議員たちの中にもイエスを信じた者が多くいた」は、本物のキリスト信者と言えますか。

【解 説】

(1) 律法でキリストはいつまでも生きて聞きた

受難週の初めの頃、過越の祭りを祝うために地方から出て来ていた改宗者のギリシャ人たちが主イエスにお目にかかりたいという申し出をした時、それを聞かれた主は、一粒の麦の話をした。

そして最後に、ご自分が十字架につけられて死なれることに言及なさった。すると、それを聞いていた群衆は、合点がいかないらしく、質問をした。

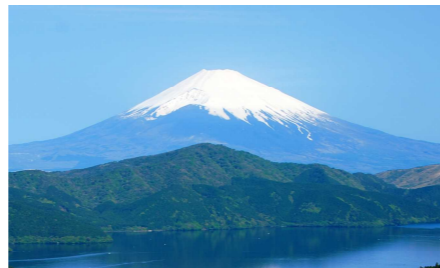
「私たちは律法によって、キリストはいつまでも生きて聞きました、あなたはどうして、人の子は上げられなければならないと言われるのですか。その人の子とはだれですか。」(34節a)

旧約聖書では、確かに救い主は永遠に生きておられると教えられている(イザヤ9:7、詩篇110:4、エゼキエル37:25、ダニエル7:14、ミカ4:7)。

しかし同時に、救い主は王座に着き永遠の王として支配される前に、苦しみを受け、十字架にかからなければならないことについても教えられている(イザヤ53:7、ダニエル9:26)。救い主は苦しみを受けてから栄光を受けるというのが、旧約聖書の教えているところである。

(2) 光があるうちに、光を信じなさい

群衆の「その人の子とはだれですか」といった質問にはお答えにならないで、世の光であるご自分が人の子なのだ



相模湾の方向から見た富士山と箱根の山

いうことを前提として、次のように言われた。

「もうしばらく、光はあなたがたの間にあります。闇があなたがたを襲うことがないように、あなたがたは光があるうちに歩きなさい。闇の中を歩く者は、自分がどこに行くのか分かりません。自分に光があるうちに、光の子どもとなれるように、光を信じなさい。」

イエスはご自分のことを改めて世の光と言われた。その光があなたがたと共にいるのはあとわずかである、と主は念を押された。

主はご自分を、太陽、また太陽が発する昼間の光にたとえておられる。太陽は朝昇り、正午に頂点に達し、夕暮れには地平線のかなたに沈む。太陽が我々と共にいるのは限られた時間にすぎない。太陽は出ている間に利用しなければならない。夜が来ると、もはやその恩恵を受けられないからである。

「闇があなたがたを襲うことがないように」主はここでユダヤ人に対し、もし彼らが主の忠告を無視するならば、恐るべきことがあると警告しておられる。歴史学者ヨセフォスによれば、紀元70年、ティトゥスによってエルサレムが包囲されていた時のエルサレムの住民の異常な状態についての記述は、この聖句のよい注解である。エルサレムの最後の日々のユダヤ民族の状態は、まさに「経験し得る最大の暗黒」としか言えないようなものであった。彼らはキリストを拒絶することによって自分の目玉をくり抜き、盲目にされた人ようになり、その悲惨から逃れ出ることができなかつた。

「自分に光があるうちに、光を信じなさい。」分かりやすく訳すならば、「わたしがあなたがたと一緒にいる間に、世の光であるわたしを信じなさい」と言われた。それと同時に、彼らが信じることの目的も示されている。「それはあなたがたがわたしの子となり、心に光を持ち、良心に光を持ち、生活の中に光を持ち、現在の歩みのために光を持ち、未来の計画に対して光を持つためです」「光の子」という表現は、ヘブル語の言い回しであり、「光と親しい関係を持ち、光の完全な影響のもとに置かれる」という意味である。このように語られた後、主は人々を離れ、一時的に身を隠された。主は天からの声の出来事と、それに続く騒動の後に、ベタニアに立ち去られたと考えられる。

(3) 彼らはイエスを信じなかつた

イエスがこれほど多くのしるしを彼らの目の前で行われたのに、彼らはイエスを信じなかつた。それは、預言者イザヤのことばが成就するためであった。彼はこう言っている。「主よ。私たちが聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕はだれに現れたか。」(37-38節)

ヨハネ福音書で記している奇蹟は7つしかないが、実際はそれ以外にも多くの奇蹟をされた。しかし、ユダヤ人が信じない、というのはイザヤ53章1節の預言の成就であった。「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか」という問いは、「信じた者は決して多くはない」という答えを暗示している。これはヘブル語的反語的表現である。

(4) 彼らの心を頑なにされた

イザヤはまた次のように言っているので、彼らは信じることができなかつたのである。「主は彼らの目を見えないようにされた。また、彼らの心を頑なにされた。彼らはその目で見ること、心で理解することも、立ち返ることもないように。そして、わたしが彼らを癒やすこともないように。」イザヤがこう言ったのは、イエスの栄光を見たからであり、イエスについて語つたのである。(39-41節)

この引用もイザヤ6章9-10節からのものである。神はイスラエルの人々の目を盲目にし、その心をかたくなにされた。最初からそうされたのではなく、彼らが強情に、また故意にメシアを拒絶した結果、自らのせいで目が見えなくなり、理解できなくなり、回心できなくなり、いやされなくなったのである(出エジプト10:20)。

イザヤ6章には、預言者イザヤが神の栄光を見たときと書かれている。ヨハネは、イザヤが見たのはキリストの栄光であったこと、そしてイザヤが語っていたのはイエスのことであった、という説明を加えている。

(5) 議員たちの中にもイエスを信じた者が多くいた

しかし、それにもかかわらず、議員たちの中にもイエスを信じた者が多くいた。ただ、会堂から追放されないように、パリサイ人たちを気にして、告白しなかつた。彼らは、神からの栄誉よりも、人からの栄誉を愛したのである。

(42-43節)

議員たちの中には、イエスがメシアであると信じた者が多くいた。しかし、会堂から追放されるのを恐れて、自分の確信を他の人に話すことをためらつた。ユダヤ人が会堂から追放されることが、どんなに恐ろしいことであつたか、私たちは想像することができない。1つの会堂から追放されたなら、世界中のどこにも、他に行くべき会堂がなかつたそうである。臆病なユダヤ人たちの心の中の一番強い動機が何であつたかを、明らかにしている。彼らは神に称賛されることよりも、人々からよく言われることを重んじていた。このような人がキリストを信じる真の信者と言えるだろうか。この信仰が頭だけの信仰であり、心からの信仰でなかつたことは、疑う余地がない。

「人を恐れると畏にかかると。」(箴言29:25)。人を喜ばせ、人にほめられたいという欲望ほど、打ち勝つのに困難なものはない。それは信仰による以外には、打ち勝つ方法はない。

「私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝つ勝利です。」(Iヨハネ5:4)。信仰によって、神、キリスト、天国、地獄、さばき、永遠などを現実のものとして知ることこそ、人間を恐れることに打ち勝つことができる偉大な秘訣である。